

学位（博士）論文要旨

先住民における労働変容と相対的底辺化

—フィリピン・アエタを事例として—

首都大学東京大学院 人文科学研究科 社会行動学専攻

2015 年度 博士論文

吉田 舞

I. 論文の概要

本論文の目的は、フィリピンの市場社会の構造を、先住民アエタ（Aeta, 以下、アエタ）の事例を介して分析することにある。これにより本論文では、先住民を排除する市場社会の構造を、アエタを通して問題提起する。この意味で、本論文は「先住民の研究」ではなく、先住民を介した「市場社会の研究」を目指した。

アエタは、1991 年のピナトゥボ火山噴火を機に、急速に市場社会に参加することになった。しかし、彼/彼女らは、市場社会では「差異を持つ人びと」として、平地民（多数派のクリスチャン・フィリピン）の労働者とは異なる位置に置かれている。平地民の階層や所得の二極分化が進むなか、アエタ内でも格差が生じはじめている。しかし、市場社会へ積極的に参加し、現金収入を得るようになったアエタであっても、平地の労働市場では〈差異化〉され、底辺の位置にとどまっている。

本論文がアエタを研究対象とする理由は、3 つある。まず、アエタが、ピナトゥボ火山の噴火後、およそ 10 年間という短期間で市場経済に積極的に参加するようになったことである。次に、アエタが、狩猟・採集や焼畑などの山仕事、米軍基地内でのインフォーマルな雑務を基本とする混合経済から、市場経済という異質な経済システムへ移行したことである。最後に、アエタが、平地の労働市場のなかで、声の小さい存在であるという点である。ここには、平地民はもとより、他の国内の先住民やエスニック・マイノリティ集団とは異なる、アエタ特有の状況と問題がある。そして、このような状況にあるア

エタであるからこそ、市場社会において、「相対的底辺化」の圧力を強く受けることになる。

本論文の主題にある相対的底辺化の「相対的」とは、平地社会のなかで「アエタ」という先住民の集団が相対的に底辺化していることを指す。また「底辺化」とは、先住民が、平地の労働階層において、①低賃金で不安定な下層労働や、職業威信体系のなかで周縁的な職種に就くこと、その結果、②生活が窮乏化することの 2 つの意味を持つ。本論文では、このような、市場社会における先住民の相対的底辺化の要因およびそのプロセスを、2000 年～2013 年までの 13 年間のフィールドワークのデータを用いて明らかにした。

II. 論文の内容

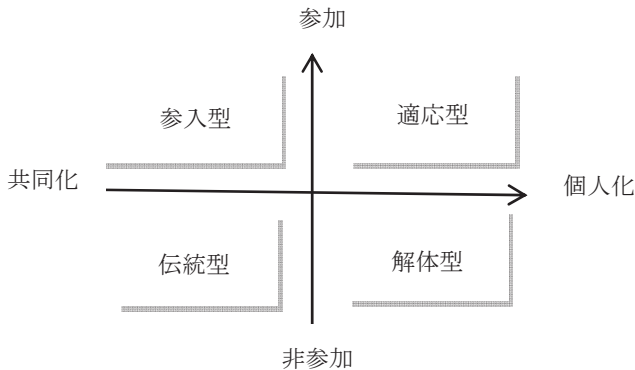
本論文は、主題を理論的に提示する 1 部と、主題を事例で検証する 2 部の構成をとる。序章では、まず、ピナトゥボ・アエタの全体的な概要と、先住民の相対的底辺化の定義を行った。次に、本論文の問題関心として、現代における先住民の問題を、本質化された先住民の問題として捉えるのではなく、先住民を介した「市場社会の研究」という視点から捉えることの重要性を示した。

1 部 1 章では、本論文の調査対象および調査方法について説明した (1 節)。2 節では、調査地であるサパ (Sapa) の集落の概要と、サパのアエタのたどった経済史を 4 期に分けて説明した。3 節では、国家のアエタに対するまなざしについて考察した。そこでは、国家の外に置かれ「棄民」のような状態であったアエタが「国民化」されるプロセスに着目した。まず、開発政策において、先住民が「政治的に中和」されている点を考察した。サパでは、先住民の文化を尊重し、「アエタらしさ」を残しながら進められる開発事業に対し、強い反発は出ていない。しかし、その開発事業のなかで、アエタは安価な労働者として「国民化」されていく。次に、都市部の先住民の「社会問題化」に着目した。都市部では、物乞いをする先住民は「侵入者」として排除された。他方、すでにコミュニティを作っている先住民や、長期間路上で生活している先住民に対しては、貧困対策として現金給付が実施された。ここでは、各事業の課題点を整理し、社会的包摂による新たな排除や、国家による貧者

の選別を指摘した。4節では、フィリピン社会におけるアエタの呼称をめぐる問題について整理した。ここからは、市場社会の中でアエタのイメージや、〈差異化〉を理解するための重要な示唆が得られた。

また、2章1節では、先行の社会的排除論や先住民研究、貧困研究において、「市場社会への参加」と「先住民らしさ」がどのように捉えられてきたかについて考察した。ドミナント社会におけるマイノリティのくびとの参加に関しては、先行のマイノリティ研究で議論されてきた社会的排除論を取り上げ、その限界を説明した。また、先行の開発研究における「貧困（からの脱却）」の捉え方を整理し、本論文の立場を示した。2節では、仮説の提示として、相対的底辺化の説明に必要となる4つの類型と視点を提示した。本論文では、アエタの労働と生活の変容を、共同化・個人化、市場社会への参加・非参加という視点を軸に考察した。さらに、「参入型」「適応型」「伝統型」「解体型」という4つの類型を設定した（図）。

〔図〕 市場社会におけるアエタの状況



2部は、3章から5章にかけて、「適応型」「伝統型」「解体型」のアエタの労働と生活について記述した。3章の「適応型」では、平地の労働市場で働くアエタの状況と、アエタの労働と消費に対する価値の変容について考察した。アエタは平地の労働市場において、安価な労働力として〈差異化〉されている。そこでは、多くのアエタが、生活向上や階層の上昇が制限され、貧困化

の道をたどっている。一方、市場社会で排除されたアエタは、苦しい生活から脱出するため、市場的価値に適応しようとする。このようにアエタは、市場社会への適応の過程で文化的に取り込まれる。本論文では、排除された人びとこそが、支配的価値に取り込まれていることを指す「文化的包摂」という概念を用いて、アエタの市場的価値への変容を考察した。ここでは、アエタの「文化的強調と社会構造の結びつき」による、排除の過程と構造をみることができた。4章の「伝統型」では、伝統的価値の変容に着目した。具体的には、アエタの仕事・労働の変容や、婚資の慣習、協同組合、女性の内職、時間の価値の変容について考察した。5章の「解体型」では、集落の共同体ネットワークから断絶され、都市部でホームレス化するアエタの生活の実態について記述した。6章では、3章から5章の関係性を検証し、3つの章の解釈を行った。まず、市場社会におけるアエタの差異/〈差異〉の意味の変容について分析し、仮説を実証した。具体的には、4類型の間を移行するアエタの特徴を抽出し、それぞれの類型との関係性を分析した。仮説の検証の結果、アエタは民族としての共同性や相互扶助を残しつつ、労働市場でも国家社会のなかでもアエタとしての存在を認められる「参入型」に移行できないまま、「適応型」「伝統型」「解体型」にとどまっていることが確認できた。最後に、7章では、本論文のまとめとして、アエタを労働者もしくは棄民として〈差異化〉する市場社会における排除の構造と相対的底辺化を再考した。

Ⅲ. 結論

アエタだけ（開発から）おいていかれるんだ。おいていかれるんだよ。集落が開発され、発展することはいいいことだ。こうやって村を見渡しても、以前と比べて発展しているのは分かるだろう。でも、なぜか平地民ばかりが豊かになっているんだよ。[首長 2012 年 3 月 22 日、多目的集会所横にて]

これは観光開発が進むサパの首長の言葉である。なぜアエタだけが「おいていかれる」のか。なぜ、アエタはますます生活が苦しくなるのか。本論文

は、この回答を得るための試みであった。市場社会において、アエタは「差異を持つ人びと」として〈差異化〉された。その結果、市場社会に参加したアエタは、相対的に底辺の位置に据え置かれている。市場社会は、アエタの伝統的な価値観や身体を「無能化」し、彼/彼女らの精神世界をも「合理化」させた。市場社会のなかで、アエタは「持たざるもの」となった。そこで、アエタは市場的価値の受容と、経済的性向の身体化を強要された。アエタは、〈差異〉を克服するため、市場社会が求めているそれらに適応しようとした。しかし、アエタが〈差異〉をなくそうとするほど、人びとの生活は圧迫されていった。こうして市場社会におけるアエタの排除は再生産された。

いま、アエタは市場的な価値や生活スタイルを受け入れ、市場社会に適応する「適応型」に向かっている。しかし、市場社会では「適応」できるアエタと、そうでないアエタが出てくる。「適応」できなかったアエタの多くは「伝統型」に戻り、ひっそりと生きる。しかし、市場社会のなかで、アエタの共同的な集団帰属は解体されつつある。その究極の形として、路上でひっそりと生きるホームレスの姿がある。今後、「適応型」からこぼれ落ちた際の受け皿がなくなったとき、アエタは「解体型」に下降するしかない。搾取される国民か、放置される棄民か。アエタに残された道は、この2つしかないのだろうか。先住民を搾取し、放棄するのか。アエタが市場社会に「参入」できるかどうかの鍵は、平地民側に委ねられている。

主要参考文献

- 青山和佳, 2006, 『貧困の民族誌ーフィリピン・ダバオ市のサマの生活』東京大学出版会。
- Bourdieu, Pierre, 1977, *Algérie 60: Structures économiques et structures temporelles*, Éditions de Minuit (=1993, 原山哲訳『資本主義のハビトゥスーアルジェリアの矛盾』藤原書店)。
- 岩田正美, 2008, 『社会的排除ー参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣。
- Merton, Robert, 1949, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, The Free Press (=1961, 森東吾他訳『社会理論と社会構造』みすず書房)。

西澤晃彦, 2010, 『貧困の領域－誰が排除されているのか』 河出書房新社.

清水展, 1990, 『出来事の民族誌－フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』 九州大学出版会.

Young, Jock, 2007, *The Vertigo of Late Modernity*, Sage (=2008, 木下ちがや・中村好孝・丸山真央訳『後期近代の眩暈－排除から過剰包摂へ』 青土社).

(よしだ まい・特定非営利活動法人 社会理論・動態研究所 研究員)